

少子化や晩婚化は日本の社会に大きな影響を及ぼしています。ブライダル業界にも打撃を与えています。

近年は企業経営者、自治体関係者たちと会うたびに若い世代の話になります。「出会いの場が少ない」「携帯電話やパソコンにはかり向かい、人付き合いが苦手」など、人間関係が以前に比べて希薄で、傷つくことに臆病になっている、というのが共通の若者像です。

▲国立社会保障・人口問題研究所が2005年に行った「結婚と出産に関する全国調査」によると、独身者で「交際している異性がない」と答えた人は男性52・2%、女性44・7%。「恋人として交際している

# 日本に結婚のある限り

異性がいる」は男性24・3%

、女性31・9%だった

▽ 婚礼衣装を一生懸命アピールするだけではもはや十分でない危機感が募り、06年から「恋人の聖地」プロジェクトを、NPO法人地域活性化支援センター（静岡）と始めました。

全国各地の風光明媚なスポットを、ロマンチックな名所にして、カップルたちのプロポーズの場にできないか、という企画です。多くの自治体や企業の協力もあり、現在までに全国89か所が認定されました。来年の4周年までには100か所達成を目標に活動を続け



ウエディングドレスのチェックをする桂さん＝田中成浩撮影

ています。その場所を訪れ、結婚したカップルも誕生しました。この活動は私のライフワークの一つです。結婚は多くの人にとって通過地点ですが、私にとっては一本の長い道なのです。今こそ「女性企業家」という形で紹介される機会が増えましたが、前例のないことに挑戦し続けるのは苦難の連続です。

それでも仕事を続けることができたのは、新郎新婦だけでなく家族や関係者が浮かべる幸せそうな表情が、私のエネルギーとなっていたからです。

日本は豊かな国になり、婚礼衣装も日本ほど充実している国はないでしょう。でも、結婚がある限り、私の仕事は終わりません。私にゴールはないのです。

＊

（おわり）

毎年正月には、新しい手帳に45年間の大切な出来事を書き写していきます。長年の習慣です。「64年、赤坂に日本初のブライダル専門店オープン」「87年、パリで初めてのコレクション開催」など、30年以上も前のことも書いてあるので

この連載は、編集委員の宮智泉が担当しました。次回は1月4日から「五輪ファン・アントニオ・サマランチ」が始まります。なお、記事コピーサービス（有料）は読者センター（☎03

3246・2323）へ。

## 桂由美のブライダル

24 桂 由美 ブライダル

ブライダルファッションデザイナー